

## 流れ星古書店

渡邊 悠

その日、大学四年生の平岡風は頭を抱えながらいつもの道を歩いていた。頭痛の種は、研究で発見したことを教授の名前で発表するかしないかでチームが真っ二つに割れてしまっていることだ。賛成派は何も問題ないが、反対派は自分たちが発見したことを横取りされるのが我慢ならないらしい。しかし、そもそも教授がいないと研究自体が行われたかも怪しい、というのが悩ましいところである。チームのまとめ役である風はほとほと困り果てていた。

そんな考え事をしてしていると、うっかり道を一本通り過ぎてしまい、裏路地に入り込む。よく通る道の近くであるし、少し前に探検がてら歩いたこともあった。しばらく進んでいくと流れ星古書店という小さな古本屋を見つけた。風は不思議そうに、

（前にこんなお店あったっけ？ まあ、本

を読んでいたら気晴らしにはなるかな）

と、首をかしげながらも店の扉を開けた。扉には星形の掛札があり、店内も星形の飾り付けやポップがとても可愛らしかった。品揃えは少ないが、綺麗な背表紙がちらほらと棚に並んでいる。素敵な店内に思わず、

「うわあ」

声が出てしまう。すると、古書店の奥にいた背の高い青いワイシャツの男性が、「ようこそ、流れ星古書店へ。ここは思い出の本たちを集めた店です。ゆっくりと見ていってくださいね」

にっこりと微笑んで挨拶をした。風は少し恥ずかしそうにはにかんで会釈し、「見たことのない本ばかりですね。素敵な表紙です。これなんかも良さそう」一冊手に取る。本を片手に周りを見ながら、

「最近お店を始められたのですか？」

店主に聞く。店主は人差し指で頭をかきながら、

「はい、まだ品揃えが充実してなくて申し訳ありません。最近あまり流れ星が見つからないものですよ」

と、話す。風は一度頷いてから首をかしげ、

「そうなんです。って流れ星と本の品揃えは関係ない気がするんですけど」

「いえいえ、大ありですよ？ とても重要なことなんです。もしよろしければ、今夜流れ星を探していただけますか？ そうしたらきっと新しい本が入荷しますよ」

風はとても不思議そうに、

「はあ、一応探してみますね」

返事をして、手にしている本をレジに持って行き、

「これ、お願いします」

と、会計を頼む。店主は嬉しそうに、「ありがとうございます。こちらも、今夜期待していますね」

本を包装して渡す。風は買った本を抱えながら店を出て、

（変わった人だったなあ。まあ、流れ星

を探すだけだし、たまには空を見上げてみるのもいいかな)

と、家へ帰るのだった。

家々の窓に明かりが点り始める頃、風は部屋を暗くして空を眺めている。しかし、なかなか流れ星は見つからない。かれこれ、一時間は空を眺めているのだが。「ふう、意外とみつからないなあ。そういえば、昔流れ星にお願いすると叶うって言って探したっけ。この広い空をずっと眺めていたものね」

なんだか懐かしい気持ちになりながら、ふと思う。

「そういえば、星の名前って見つけた人の名前がつくのかな？一番に見つけたら私の名前がついたりして、ふふっ」

そして、  
「そうだ！これならみんな納得するかも！」

と、何かひらめいた。その瞬間空を光が流れる。

「そうか、探しているとなかなか見つからないけど、ふと見つけるから印象に残るのね。よし、風流星一号、なんちゃって。ふふっ、あの本屋さんにも伝えてあげよ

うっと」

翌日、風は研究室の全員を集めて、

「今回の研究は教授が発見した、という形で発表してもらおうと思います。ただ、それでは納得のいかない方もいるでしょう。なので、この研究の名前には、このチーム全員のイニシャルの片方を使ってもらうのはいかがですか？私も昨夜いくつか考えましたが、研究内容の意味を損ねず入れることは可能でした。これなら、公には普通の研究として、知っている人には隠された裏話として残すことができます」

教授もメンバーも一様に目を丸くして顔を見合わせたが、皆頷いて納得したようだ。風はぼんと手を打って、

「では、この件はこれで決着ということ。さあ、発表までの詰めのデータ検証を頑張っていきましょう」

と、話をまとめた。全員が狐にまつまされたような表情をしながらも、それぞれの持ち場で検証を続ける。風も胸を撫で下ろし、研究に励むのだった。

その日の夜。少し研究室に長くいたた

めに遅くなってしまったが、昨夜の流れ星のことを伝えるために古書店を訪れた。店からは微かに明かりが漏れていて、以前とは違う流れ星の掛札が扉にかかっていた。扉を開けると飾り付けが星のように輝いて、まるでプラネタリウムのようにうっとりとその光景に見とれていると、ちようど店主が店の奥から出てきて風は我に返る。と、同時に意気揚々と胸を張り、

「こんばんは。昨日、流れ星を見つけましたよ。風流星一号です！」

すると店主は冗談で言ったことを真に受け、笑顔で、

「それはそれは。素敵な流れ星ですね」

と、返す。風は少し困惑し、

「えと、幼稚だなあ、とかはないんですね」

聞き返すと、店主は、

「せっかくお手伝いいただいているのに、そんなこと思うはずがありませんよ。おかげさまでこちらも新しい本が入荷いたしました」

嬉しそうに礼を言う。風は驚いて、

「え、本当に入荷したんですか？信じられない……。どの本ですか？」

あたりをきよろきよろ見回す。店主はカウンターの裏から一冊の本を取り出して風に見せる。

「こちらの絵本です。とてもよい内容なのでお勧めですよ」

薄明かりの中で、その絵本は瞬いていくように光っている。錯覚なのかもしれないが風にはそう見えた。

「私が見つけた流れ星が本になったの……? 本当に? 読んでみたい。読んでみたいです! その本ください!」

風が店主に迫ると、

「まあまあ、落ち着いて。ここは古書店です。試し読みをしてから買われてはいかがですか?」

制止しながら伝える。風は、はっとして、

「すみません、つい興奮しちゃいました。ちょっと見せてもらいますね」

「はい、どうぞ」

店主から、絵本を受け取る。タイトルは『みんな、なかなおり』と書かれていて、イラストや文面は子供向けではあるのだが、昨夜子供の頃の懐かしい思い出がよみがえっていた風には、とても魅力

的に見えた。

「この本ください。私、なんだかもっと読みたいくなりました」

風が再度言うのと、

「気に入っていただけで良かったです。はい、お代は確かに。お買い上げありがとうございます」

店主はとても嬉しそうに会計をした。

本を受け取るときに、風は店主の顔をまじまじと見て、

「あれ? 私、あなたを見たことがある気がするんですけど、以前にどこかで会いましたっけ?」

すると、店主は少し意地悪そうに微笑み、

「さあ、どうでしょう? ここは思い出が集まるお店ですからね。あなたの思い出も集まるかもしれませんね」

「うーん、どこだったかな? 確かに見覚えあるんですが……」

風は必死に思い出そうとしている。見かねて店主は、

「そんなに気になるのですしたら、僕の名前だけはお伝えしておきますね。星野流矢です。これからも、流れ星古書店をご

ひいきに」

「あ、私は平岡風です。突然変なことを言ってますいません」

風もかしこまって、ぺこりとお辞儀をする。

「風さん、また流れ星を探していただけますか? 僕は普段、ここを離れられませんが」

星野は優しく微笑みながら風に頼む。そして、時計に目をやり、

「おっと、夜も遅くなっていますね」

風に時間を伝えると、

「あ、すみません。もう、お店閉める時間ですよ。また来ます」

風は、慌てて店を後にする。

家に帰って夜空を眺めながら、風は星野とどこで会ったのかを考えていた。近くのスーパードットだろるか。いや、も

っと一対一で顔を合わせていたような。しかし、どれだけ思い出そうとしても、会ったことまでしか記憶になく、いつ、どこで、が出てこない。そんな中、カレ

ンダーに目をやると、今週末に子供の頃の友人と会う約束をしていたことに気づく。年末に約束をして、カレンダーに印

を打つほど楽しみにしていたのだが、先月電話で喧嘩をしてしまい、会うべきか悩んでいた。風はどうやって仲直りしようか考えあぐねていた。そういえば、テーブルの上にある買ってきた本は、絵本ではあるが仲直りがテーマだったと思出し読み始める。内容は幼い子供が互いに本心ではないのに大嫌いと言ってしまう。そして、仲直りの方法を探す、というものだった。本心でないのなら謝ったらいいのでは？ と母親に言われて、おぼえずと謝ると、向こうもごめんなさいと言つて仲直りする。すごくシンプルなことなのに、近頃はそれが出来なくなつて自分の身に気づく。

「そうよね、私たちもこうやって仲直りしてたのに。何でうまく言えなくなっちゃったんだろう」  
しばらく考えて、  
「うん、やっぱり謝ろう。昔みたいに簡単じゃないかもしれないけど、ちゃんと気持ち伝えないと」

携帯電話を手取る。コール音が三回鳴って相手が出た。

「もしもし、私。この前はごめんね。私、

余裕がなくてイライラしてて。あんなことを言うつもりはなかったの。……うん、そう。じゃあ、週末の約束は……本当？うん、楽しみにしてるね！」

風が素直に謝ると相手も喧嘩の後、ずつと謝ろうとしていたが、うまく言えずにいたことを話してくれた。電話の後で、「なんだかんだで、仲直りの方法って昔と変わらないのね。いろいろ考えちゃうようになって、自分で難しくしてるんだわ。この絵本のおかげで仲直りできて良かった」

絵本を大切に手に取る。そして、ベッドの枕元において布団に入り、  
「おやすみ、私の流れ星」  
と、眠りにつくのだった。

次の土曜日、風は約束の待ち合わせ場所立っていた。友達が絶対にこちらから見つける、と言つて聞かなかつたので、予定時間を三十分も過ぎても待っているのだ。約三十分前から、周りの人の顔のぞき込んでうろろろしている、明らかにその人を目で追いながら。しかし、さすがにしびれを切らせて、

「おーい、ひろちゃん」

と、声をかける。

「え、風ちゃん？ うそ、全然変わっちゃってるじゃん。こりゃ、見つけれないわけだ」

驚いたように、しげしげと風の顔を見つめる。

「私もひろちゃんがここで人探しをしてなかつたらわからなかつたよ」

ひろちゃんこと吉原博美とは、小学校時代から今でもやりとりしている間柄だ。いつも二人で遊んだり、互いの悩みを相談しあつたりしていた数少ない友人だ。風が親の都合で転校して、さらに上京してしまい会うことがほとんどなくなつていた。ところが、博美が東京に来る用事があるので、再会しようということになったのだった。

「ねね、せっかく東京に来たんだし、名所案内をお願いしてもいいかな？」

博美が風に頼むと、

「うん、いいよ。でも、定番のところじゃ代わり映えないから私のお勧めスポーツ十選、まとめてきたんだ。じゃーんー」  
風は小さなブックレットを取り出す。

「うわあ、風ちゃんのお勧め楽しみ。早く行くようよ」

博美は目を輝かせて、風の手を引っ張り駆け出しそうだが。

「慌てなくても大丈夫だよ。タイムスケジュールもばっちりなんだから。それじゃあ、最初のスポットに向けて出発しよー」

博美に急かされながらも、風は落ち着いて時計を見て、二人で東京散策を始める。風のブックレットには電車での移動時間はもちろんのこと散策先でどれくらい時間をとるかなど、綿密に計画されていた。さらには、博美が行った先でもう少し見ていたい、ということまで織り込み済みであった。そして、スポット巡りも最後の一つになり、風たちはおきスポットである流れ星古書店へとやってきた。

「ここが、私の一番の穴場スポットよ。なんていったって流れ星が本になるお店なんだから！」

博美に自慢げに紹介するが、  
「そんなことあるわけじゃない。でも、風ちゃんって昔からそういう夢物語好きよね」

博美はやれやれといった表情で懐かしむ。  
「ほんとなんだって。まあ、入ってみればわかるよ」

風はむくれてドアノブに手を伸ばすが、いつもは開いているはずなのに流れ星型の掛札がクローズになっている。首をかしげて、

「今日って土曜日よね？ いつもは、やっているのになあ。日曜とか祝日は比較的に休みが多いんだけど」

と、不思議そうだが、店の窓から中をのぞき込んで様子を見がうと、店の奥に続く通路に星野の姿が少しだけ見える。誰かと話しているようだが、声は聞き取れない。店が閉まっていることに博美が、  
「もしかしたら、流れ星古書店だから曇りの日はお休みなんじゃない？」

冗談半分で言う。だが、風は真に受けて真剣な表情で、  
「確かにそうかも！今までも偶然お休みなのかと思ってたけど、全部曇りの日だった。なるほど、すると……」

考え込んでしばし無言になる。博美は風をひらひらと手で扇ぎつつ、  
「おーい、冗談だよ？帰っておいで」

空想の世界に行ってしまったと思われる風を呼び戻す。しかし、反応した風は真顔で博美の両手を握り、  
「凄く発見だよーさすがはひろちゃん！」  
目をきらきらさせている。すべてのスポットを回り終えて、  
「一番のスポットを見せられないの残念だけど、私のお勧めはこれくらいだよ。楽しんでもらえたかな？」

風は博美に感想を聞く。博美は大満足  
の笑みを浮かべて、

「実際に住んでないとわからないスポット満載でとても楽しかったよ。風ちゃんありがとう。今度は晴れている日に、ここに来ようね」

と、約束するのだった。

博美を新幹線の乗り場まで見送ったその帰り道。風は空を見ながら家の最寄り駅から歩いてきた。日暮れ頃から空が晴れてきて、星空が見えていたのだ。以前の経験を生かし、空全体を眺めて光が流れるのを待っていた。博美と楽しい時間を過ごしたおかげで、流れ星探しも楽しくなっていた。そして次の瞬間、長い尾を引いて光が流れる。前よりも明るいそ

の光は、風の心を満たしていくのだった。家に着いて手際よく夕食の支度をし、好きなドラマを見始める。すると、台詞で「あなたにとつて一番大事なものは何？」と問いかけるシーンがあった。風は自分にとつて大切なものを考える。家族も大切、友達も大切、勉強も生活もお金も。大切なものはいくつも挙がるのだが、どれが一番大切かと問われるとなかなか一つに絞れない。あまり考えすぎても煮詰まるのでドラマが終わったら寝ることにした。明日、また古書店へ寄る予定をしているのだから。

風が眠りにつくと、夢の中で聞き覚えのある声がある。あなたの大切は考えて見つかるようなものですか？と。はつ、と目を覚めますが、誰もいない。不思議な夢を見たことを頭の片隅におきつつも、いつも通りに大学へ行き、夜遅くまで研究をするのだった。帰りに古書店へ寄るとドアの掛札と内装が変わっていた。光で演出される星座が前とは別のものになつている。店のカウンターには星野がいて、風に向かい軽く会釈する。風が、「昨日も流れ星を見つけたのですが、新

しい本、入ってますか？」

と、尋ねると、

「はい、今回も良い本が入荷しましたよ。今、店内にある中でもお勧めの一冊です」

星野は嬉しそうに本棚の上の方から「人生の宝の見つけ方」という本を取り出す。以前と同様に、その本も微かに瞬いているように見える。ぱらぱらと流し読みすると、あなたの宝はこう探そう、という章があった。偶然ではあるが煮詰まりそうになつていたことに近いので、購入することを決めた。

「じゃあ、お勧めの本ください」

星野に伝えると星野はレジで会計を始める。それを待つ間に、

「このお店の本の価格ってどうやって決めるんですか？ 流れ星なら値段をつけるの難しそう」

風は思つていたことを素直に尋ねると、星野は少し考えてから、

「そうですね、その本の思い出の深さ、大きさに比例する、とでも言いましようか」と、返答する。

「なるほど、思い出の価格ですか。そして、きちんと気持ちを込めてお支払い

しますね」

風は納得して丁寧で代金を支払う。

「そうしていただけると、この本も喜びます。ありがとうございます」

星野も丁寧に受け取る。そして流れ星古書店オリジナルの紙袋に入れて渡し、帰り際の風に、

「またいらしてくださいね。夜もなるべく店は開けていますから」

と、声をかける。風が店の敷地を出ると店内の照明は消え、内装のほんやりとした明かりがうつすらと残る。風は財布の中に買い物メモを入れていたことを思い出し、バッグを探る。しかし、財布が入っていない。服のポケットかと思ひ、ほんぽんとあるだけのポケットを押さえてみるが、無い。先ほど代金を支払った時に店内に忘れてしまったのだろうか。明かりが消えてしまつているが、店内にはまだ星野がいるだろう。店に戻り、ドアノブに手をかけると鍵は開いており、扉を開ける。風が店内に入ると、星野の姿はない。店の奥にいるのだろうか。通路に向かって星野の名前を呼ぼうとした瞬間、カタンと物音がする。少しおびえ

ながら、

「星野さん、そこにいますか？」

話しかけるが、返事はない。物陰でうつすらとした光が動いている。恐る恐るのぞくと、店の内装の明かりがまるで空の星のように、ゆつくりと、ひとりで動いている。風はその光景に吸い込まれるような感覚を覚えた。気がつくと、風は宇宙空間にふわふわと浮いていた。呆氣にとられながらも、なぜか澄み切った気持ちでいる。壮大な天体ショーを見ていると風に向かって大きな彗星が飛んで来た。ぶつかる、と思い反射的に目を閉じる。まぶたの外が眩い閃光に覆われ、恐る恐る目を開けると、周りの星がびたりと動かなくなっていた。直後、足下から落下し暗闇の中に、ゆつくりと着地する。目をこらせてあたりを見渡すと、普段の流れ星古書店だった。

「私、夢を見ていたの？ 今の光景は一体……」

一人つぶやく。すると店の奥から星野が出てきて、

「おや、風さん？ 帰られたのではなかったのですか？」

と、尋ねる。

「すみません、お財布をお店の中に入り忘れてしまいました。たぶんお会計の時間におきっぱなしにしてしまったかと」

風は慌てて星野に事情を説明する。

「ああ、これは風さんの財布でしたか。はい、お返しいたしますね」

星野はカウンターの裏から風の財布を取り出して渡す。風はお辞儀をして財布を受け取ると、先ほどのことを星野に尋ねようとする。

「あの、このお店の内装って……。あ、いえ」

話し出したが途中でやめる。自分でも、なんと説明したらよいかわからなくなっていたからだ。星野はそんな風に微笑みながら、

「ここで何を見られたかはわかりませんが、風さんが夢だと思えば夢ですし、現実だと思えば、それは現実なのですよ？」

と、論ず。風はそれを聞いて、

「そうですね、ありがとうございます。閉店後にお邪魔してすみませんでした。また来ますね。おやすみなさい」

一礼して店を後にする。

かなり遅くなってしまったので家に帰るとそのままベッドに転がる。今日、古書店で見たことは現実だったのだろうか。考えれば考えるほどわからなくなる。足をじたばたさせて枕に顔を埋めると星野の言葉がよみがえる。自分が現実だと思えば現実。ある意味妄想を肯定するかなのような言葉だが、なぜか風の心に響いていた。枕から顔を上げて、古書店の紙袋に手を伸ばす。開封して『人生の宝の見つけ方』を読み始めた。人生において宝とは、人それぞれで違うこと、他人が感じている幸せと自分の幸せとは同義でなく、いいこと、など当たり前なのだが、普段忘れてしまっていることを気づかされる。SNSの世界で適当にいいねを付けることが日課になっていて自分がいて、本当にどう思っているかを隠してしまふ。そんな日常にも著者なりの意見が書いてあった。実を言うと風は昔から周りの子供とは少し考え方が違っていた。周囲を基準とするならば、ずれていた。と表現されるだろう。故に努力して周りに合わせ、俗に言う日常を当たり障りなく過ごすことに苦労してきた。だが、こ

の本の著者は、あなたはあなたたらしく偽らないことが素晴らしい、自分があきらめる最後の瞬間まで信じてくれるのは自分だ、といってくれているのだ。そして風は気づく。自分の大切なものに。

「ああ、そうか。私は私が一番大切なんだ。ほかのことは何かしら理由を付けて大切だけれど、自分を大切にするのに理由なんてないもの」

夢の中の誰かに言われた通り考えて見つかるとはなかった。風はその人に感謝しつつ眠りにつく。

当初悩んでいた大学の研究発表もようやく終わり、風は穏やかな日常を送っている。今日も二限目の講義が終わり、次の講義まで休み時間が出来たので大学の近くのカフェに来ていた。紅茶をメインに扱っており、紅茶好きの風にとっては、ゆっくり安らげる空間であった。ティー Spoon で砂糖をゆっくり混ぜながらぼんやりと外を眺める。郊外の大学近くの高台にあるこのカフェはカウンター越しに市街地が一望できる。それが何よりのお気に入りの風景だった。一口紅茶を飲

むと、

カランカラン——

入り口のドアが開く音がする。ちらりと目をやると、同じ講義を受けている男子学生が入ってきた。実は、風はこの男子学生が最近気になっていた。名前も知らないが受講中も不意に目がいってしまふという、いわゆる淡い恋心であった。そんな風の気持ちよそに、男子学生は風の隣のカウンター席に座る。風は懸命に意識しないように努めるが、なにかの引力なのだろう。男子学生と目が合ってしまう。どぎまぎしつつも風は、

「あはは、どうも……」

挨拶する。男子学生も、

「ああ、どうも。君って同じ講義を受けてる平岡さんだよな？」

と、返してくれた。風は自分の名前を知られていることに驚き、聞き返す。

「えっ、どうして私の名前を？」

男子学生は、

「ああ、いろんなところで君の話聞かからね」

苦笑い。風はがっくりと肩を落とし、

「私、そんなにいろいろ言われているの？」

と、聞く。男子学生は慌てて、

「あ、いや、悪い噂じゃないんだ。誰も思いつかない発想でみんなの相談役になってるって、信頼の声だよ」

風はほっと一安心して、

「よかった、変な噂たてられているのかと心配しちゃった」

「ごめんね、僕の言い回しが下手で。それで、もし良ければ僕の相談にも乗ってくれないかな？」

風はパッと表情を明るくしてから、ちよつと照れつつ、

「もちろん！ あ、その前に名前、教えてもらっても、いい？」

男子学生の名前を尋ねる。すっかり忘れていたようで、

「ごめん、うっかりしてた。僕は、森田耕治、さっき言った通り同じ講義を受けてる同級生だよ。それで相談なんだけど、

実は、友達が単位足りなくなりそうので、明日の講義休むと、ほぼ卒業できないんだ。でも、旅行先でトラブルがあったらしくて、帰ってくる飛行機が飛ばないらしい。同じ企業に同期で入ろうとてずつと前から約束してたのに。それで、どう



「したらいいか悩んで」

耕治は頭を抱えている。風は打開案を考えてみた。家族の訃報なら大学側も配慮があるかもしれないが、旅行から帰ってこれないのは自己責任だ。かといって、見捨てるというのも、好意を寄せる耕治の手前、絶対に選択できない。影武者は、ばれたときのリスクが高いが……。しかし講義内容によっては出席とレポート提出で何とかなるものもあり、

「森田君、明日の講義以外にその人と森田君が取らなきゃいけないものってある？」

「いや、近々は二人とも特にないな。ほとんど終わらせてあるから」  
それを聞いた風は、  
「これは少し賭になるんだけど、明日の講義内容で提出物のみで単位もらえそうなら望みあるかも。レポート提出って、その人パソコンで文章作るよね？」

確認しておきたかったことを聞く。  
「うん、そうだね。たまに手書きする律儀な人いるけど彼は、パソコンで作ってはずだよ」

「ちょっとずるい方法にはなるんだけど、それを利用して森田君がレポートを二つ用意するのはどうか？ 時間がかかるし、友達の文面の癖は再現しないといけないけど……。私も手伝うから」

たぶん、耕治はここまでではほかの誰からもアドバイスはもらったかもしれない。それを裏付けるように、  
「それは考えたんだけど、受講票の問題があつてね」

予想通りの答えを返す。風は秘策を持ち出し、  
「ふふつ、あの教授、人の話に夢中になると、見ずにサイン入れているの気づいてた？」

風はちよつと悪そうな笑顔をやる。  
「入れるときは二枚重ねて入れればいいし、サインもらうときは私が気を引くから」  
「なるほど。そして、提出物が二人分あれば完璧かあ」

ふむふむ、と頷きながら、  
「平岡さんすごいね。ちゃんと人のこと見てるんだ。同じ講義に出ててもそんなことは気づかなかつたよ。じゃあ、その作戦でいいこう」

「良かった、森田君の役に立てて。明日レポート作成手伝うね」

耕治の顔を見ながらにっこりと微笑み上機嫌だ。耕治も感謝しきりで、

「何から何までありがとう。良かったら、連絡先教えてもらっていいかな？ 講義終わりに連絡したいから」

「もちろんだよ」

好きな人との連絡先の交換まで出来て、かなりのハイテンションで返事をする。上機嫌になり、少しだけ話題を振ってみる。

「森田君って、このカフェによく来るの？」

「うん、僕、紅茶好きだからね。お店の雰囲気も落ち着いてるし。何よりこの開けた展望が一番のお気に入りなんだ」

「うそ、私と全く同じ！ じゃあ好きな茶葉は？」

風が食い気味に聞くと、

「最近はずよつと気温が高いから、アツサムとかあつさりしたものをよく頼むよ。平岡さんは？」

「私はミルクティーが好きで、ウバとかをホットで飲むかな」

「わかるーアイスかホットかで迷ったら、僕もミルクティーでホットだよ」

耕治と紅茶談義に花が咲いた。夢中で話していると、昼休みの時間はあつという間に過ぎてしまう。風は、はつとして時計に目をやると、

「ごめん、森田君。私、次の講義入ってたからもう行かなきゃ」

「あ、もうそんな時間になってたのか。こちらこそ引き留めちゃってごめんね。相談に乗ってくれてありがとう。じゃあ、また明日」

「うん、またね」

風は耕治に手を振り、店を後にする。大学へ歩きながら、

(また明日か。ふふっ)

心の中で密かに幸せをかみしめるのだった。

翌日。講義が終わり、風は耕治からの連絡を待っていた。三分ほど経ち携帯が鳴る。風は光の速さとも思える勢いで電話に出た。

「もしもし、森田君？」

「あ、平岡さん。こっちは講義終わったけど、そっちは大丈夫？」

「うん、こっちも終わってるから大丈夫だよ」

「よかった。じゃあレポートの作成の協力お願いしたいんだけど、どこでやるうか？」

風は少し電話口で思案する。昨日の店は大学から近いが、知り合いが来るかもしれない。だが、落ち着いた雰囲気があり、こういう作業には向いていた。風は決心して、

「昨日のお店はどうか？」

「あ、一緒に紅茶の話してお店だよ。うん、いいね。そこにしよう」

提案すると耕治も賛同してくれた。風は確認のため聞いてみる。

「森田君、友達の過去のレポートって持ってきてる？」

「うん、テキストファイルで持ってきたよ。書き方の癖を真似しないと、って言うたから」

「なら、大丈夫だね。今から教室出るけど、向こうで待ち合わせにする？」

大学から一緒に行きたい、という願望を隠しつつ聞いてみる。すると、  
「向かう道も同じだし、せっかくだから

大学の出口で待ち合わせようか」

期待していた返事がきた。風は飛び上がって喜びそうなのをこらえつつ、

「本当？　じゃあ、すぐに向かうねー」

大急ぎで教室を飛び出した。

走ってキャンパスの出口に着くと、心躍らせながら耕治を待つ。ついつい、いつもの妄想、もとい空想の世界でこの後の展開を考えていると、  
「平岡さん、お待たせ」

耕治の声がする。一瞬で現実世界に戻り、  
「全然待ってないよ。私も今着いたところ」

と、かわいい嘘と満面の笑みで返し、  
「じゃあ、行こっか」

二人で歩き出す。カフェまで十分程度の道のりなのだが、風はまるで、デートしているような気持ちになっていた。必然的に笑みがこぼれてしまう。それに気づいた耕治が、

「平岡さん、何かいいことあったの？」

と、聞く。だが風は、

「うん、でも中身は内緒」

照れながら秘密にする。耕治は気になって、

「えー、教えてくれてもいいのに。まあ、内緒にしたいことは無理には聞かないよ」

苦笑いしながら残念がる。カフェに着くと、店内は空いていた。四人がけのテーブルに荷物を置き、腰掛ける。耕治がノートパソコンと教材を取り出した。自分のパソコン画面に友人のレポートを映しながら風に見せる。

「こんな感じの文面なんだけど……」

それをみた風の笑顔は少し引きつってしまう。

「なんというか、独特の言い回しだね……」

耕治の顔を一度見る。文末に「うなのだ」や「うである」が来るのはまだわかる。問題はそこに繋がっているところだ。まるで、白い髭の博士が話すような、そんな印象を与える何かが含まれている。風と耕治は、

「大変そうだけど頑張ろう……」

「うん……」

自分たちが導き出した方法の大変さをひしひしと感じるのだった。

それから四時間――

店に客もいなくなり、閉店が迫る頃。

「やっつと、終わったー!」

「お疲れ様ー!」

ややこしい言い回しの再現を成し遂げ、二人は伸びびをして机に伏せる。長引いて疲労しきっているうえに、紅茶一杯では申し訳なくなり、三、四杯は飲んでお腹もたぶたぶだ。風は耕治に、  
「ごめんね、大変なことを勧めちゃって申し訳なさそうに声をかけるが、

「いやいや、こちらこそ。最後まで付き合ってくれてありがとう。平岡さんがいなかったら、一人ではとても無理だったよ」  
顔を上げて感謝しきりだ。二人で、

「後は出席がごまかせますように!」  
「もう、ほんとに! あはははっ」

笑いながら片付ける。レジで風が会計を払おうとすると耕治が前に出て、  
「あ、二人まとめてお願いします」

と、店員に申し出た。

「え、でも……」

風が躊躇していると、

「今日のお礼だから。それくらいはさせて」  
耕治が片手で拝みながら言う。

「じゃあ、甘えちゃおうかな。そしたら、こっちらもお願いが、あるんだけど……」  
きよとんとした耕治に風は照れながら、

「また、この店で見かけたら、声、かけてね」

精一杯の勇気で言う。耕治は優しい笑顔で、

「それくらいお安い御用だよ」

と、返事をする。二人で店を出ると、辺りはすっかり暗くなっていた。

「遅くなっちゃったし、家の近くまで送ろうか?」

気を利かせてくれる。普段ならばききとしゃべれるのに、疲労と耕治への想いでいつも以上に意識してしまい、

「えっと、私の家、そんなに遠くないし、ほら、森田君も電車とか? あるかもだし」

本当は送ってほしいのだが、うまく頼めない。すると耕治は、

「じゃあ、駅の方なら途中まで一緒にいこうか?」

と、頼みやすい案を出してくれる。

「じゃあ、お願い、しようかな」

夜になっていて耕治には見えないのだが、風は顔を真っ赤にして耕治に頼む。

風は耕治と歩きながら、

「森田君って、あの、その、夜空は好き?」  
恐る恐る尋ねる。耕治は空を見上げて、

「うん、好きだよ。なんだかロマンチックでいいよね」

と微笑む。風は嬉しくなり、「じゃあ、今から駅に着くまで、流れ星を探さない？」

照れながら提案すると、耕治も乗って、「おもしろそうだね。じゃあ、駅までに一つは見つけようよ」

目標を決めた。二人で空を眺めながら歩く。しばらく歩いていると、少し明かりの少ない下り坂にやってきた。その時、今まで見たどの流れ星より、煌めく光が夜空をなめらかに滑る。二人同時に、「あ！」

そして顔を互いに見て、「平岡さん、今の！」

「うん、見えた！」

二人で歓声を上げる。

「凄く綺麗な流れ星だったね」

「今まで見た中で一番かも……」

光の通った道を二人でうっとり見つめていると、

「うん、決めた」

耕治がなにやら呟き決心する。

「平岡さん、もし良ければ僕の流れ星に

なつてくれないかな？」

「森田君、それって……」

風の心臓は、はち切れんばかりに脈打っている。

「こんな素敵な思いが出来るのは、きっと平岡さんが素敵だからだ。だから、平岡さんと一緒にいたい。流れ星を探すために、平岡さんの素敵なところをもっと見つけていきたい」

突然の告白に、風の顔は沸騰しそうに熱い。その状態で懸命に耕治を見つめ、返事をする。

「私も、森田君をもっと見ていたい。だから、こちらこそ、よろしく願います」  
小さな街灯の明かりが、まるでスポットライトのように二人を照らしていた。

風は自宅まで送ってもらい、玄関先で耕治に手を振って見送る。そして、ベッドに飛び込むと、枕に顔を埋めて足をバタバタさせて幸せをかみしめる。自分に彼氏が出来たことが初めてで、今まさに最高潮の気持ちだ。

「僕の流れ星か。〜っ！」

耕治の言葉を思い出し、一度あげた顔を再び埋めて悶えている。幸せまった

中そのまま眠りに落ちると、また夢を見た。夢の中で星野に今日のことを報告しているのだ。星野は少し複雑な、それでいて優しい微笑みをたたえて祝福してくれていた。なにやら一言言っているのだがうまく聞き取れず、そこで目が覚めてしまう。昨日、さんざんベッドで転がり回ったせいで、ぼさぼさになった髪を慌てて直しながら、

「夢にも見たし、今日お店に寄ってみようかな。そうだと、森田君も誘ってみよう」

予定を立て、大学に向かう信号待ちで耕治にメールを打つ。送信すると、周囲の人が歩き出し、バッグに携帯を押し込み、交差点を渡る。大学に着いてメールを確認すると、喜んでいくと返信が来ていた。今日は研究室の作業もなく、ウキウキ気分で講義を終え、耕治と待ち合わせで古書店へ向かう。

「今から行くところは、私のお気に入りの本屋さんなんだ〜」

「平岡さんのお気に入りか。楽しみだな」

道すがら、古書店や星野の紹介、不思議な体験を話して歩く。耕治も興味津々に聞き、二人は古書店の前に着く。仲良

くドアを入り、

「こんにちは」

店の奥でいつも通り立っている星野に挨拶する。星野は、

「おや、風さん。いらつしやいませ。今日はお連れ様も一緒ですか？」

と、普段の口調で話し、

「ああ、そういうえば、昨日珍しい本を入荷いたしました。これがまた、素敵なお話で……」

そこまで言うとな風が割ってはいる。

「それはそうですよ！だって、私たち二人で見つけた最高の流れ星ですもの！」  
耕治と目を合わせる。それを見た星野は、

「なるほど、そういうことですか」  
少し怪訝な顔をして、耕治を足下から頭の先までじつと見る。

（あれ？夢と少し違う？まあ、夢の通りにな方が不思議よね）

と、自分を納得させる。星野は自分の表情を自覚したのか、

「ああ、すみません。お客様に大変失礼な態度をとってしまいました」

耕治に詫びるが、耕治は氣にした様子もなく、

「いえ、お氣になさらずに。それにしても素敵な店内ですね」

と、周りを見回している。

「はい、風さんが流れ星を探してくださいるので、品揃えも充実してきました」

星野もその言葉に笑顔で喜んでいり。そして、

「もしよろしければ、あなたも流れ星を探してくださいませんか？」

耕治はそれを快諾して二人で流れ星を探すことが決まった。星野が、

「それでは、いつも探していたでいる風さんと、その素敵な彼氏さんに、プレゼントです」

棚の上の方から一際豪華な本を取り出す。しかし、風は遠慮して、

「そんな高そうなもの頂けませんよ。流れ星探しも好きでやっています」

「いえ、それでは私の氣が済みません。受け取ってください」

断ろうとしたが、押し切られてしまう。風が紙袋を受け取ると、

「お似合いのお二人ですね。応援しますよ。ふふ」

星野が冷やかしかかる。二人とも照

れながらもまんざらではない中、星野と談笑して店を後にする。耕治と風は

「素敵なお店だったよ。さすが平岡さん」  
「私は何もしてないよ」

などと、話しながら帰るのだった。

一週間が経ち、朝のニュースで今日から梅雨入りだと伝えていた。風は残念そうに、

「ああ、今日からしばらくお店お休み増えちゃうなあ……」

天気予報を見ため息をつく。曇りや雨の日が多いせいで流れ星探しが出来ず、一昨日も耕治と二人で店を尋ねたが、休みだった。店のドアにも心なしか残念そうな流れ星の掛札。今日も一人で寄ってみたのだが休みは相変わらずだった。

風は後ろ髪を引かれつつ帰ろうとする、と、

「今日も来てくださったんですね」  
と、声をかけられる。振り返ると星野が立っていた。申し訳なきように、

「いつも来ていただいているのにすみません。曇りや雨の日はどうしてもお休みさせていただきますので。でも、せっか

く来ていただいたので、良ければ、お茶でも飲んでいきませんか？」

風を誘う。風も控えめに、

「じゃあ、一杯だけ、いただいでいきます」

と、店内に入る。星野は店の照明のスイッチをパチパチと入れて奥へ入っていく。

「風さん、コーヒート紅茶とどちらがお好みですか？」

奥から風に問いかけると、店の椅子にちょこんと腰掛けた風は、

「紅茶の方をいただいでもいいですか？」

と、返事をする。少しすると、星野がティーポットとカップを持ってきて、

「僕の好みのものなので、お口に合うといいのです」

慣れた手つきで紅茶を注ぐ。かわいい柄のカップに注がれた紅茶を一口飲んで、

「うん、美味しいです。なんだか、懐かしい味がします」

笑顔で星野を見る。

「それは良かった。ところで風さん。以前からお伺いしたいことがあったのですが……。どうして風さんは僕の言うことを、こんなに信じてくださるんですか？」

星野は嬉しそうにしてから風に尋ね

る。風は少し考えて、

「うーん、理屈じゃないんですが、星野さんのお話ってこう、夢があるなって思っています。私はこういったお話好きで、

でも周りからはいつまでも子供じみたこと言ってる、とからかわれて辛かったんです」

肩を落とすが、もう一度星野を見て、

「でも、星野さんは、私以上に夢物語を話してくれて、とても安心できるという

か、共感できるんです」

それを聞いた星野は安堵して、

「そうですか、僕の存在が風さんの救いになっていたのですね」

笑顔で話すが、その後、しばらく真剣な表情で考え込んでしまう。

「星野さん、どうされました？」

風が問うと、星野は決心したように真顔で、

「風さん、お店はしばらく休みが続いてしまいます。ですので、梅雨が明けたら広野ヶ丘公園で流れ星を探していただけますか？」

きよとんとした風は、

と、返す。星野はなにやら思い詰めた表情をしていたが、

「また、今までで一番の流れ星を見つけてきますから。そんな顔しないでください」

紅茶を飲み干し、自信満々に言う。そして、

「お休みのところ、押しかけてしまった上に、お茶までいただいでしていません」

一礼をして店を出る。星野も敷地の入り口まで見送りに出てきた。

「それでは風さん。しばらくのお別れですね。お気を付けてお帰りください」

と、風が見えなくなるまで見送った。

しばらく梅雨が続き、一月が流れた。ニュースで梅雨明け宣言が報じられ、風

は星野との約束通りに広野ヶ丘公園にやってきました。初めて来るはずなのに、な

ぜか懐かしい。芝に座りながら星を眺めていると、過去にもこういったことが

あったように感じる。そして、流れ星が空を駆けたその瞬間。風の記憶の奥底に

あったものが一気にあふれ出す。

「あ……、あ……、そんな……。私、なんでこんな大切なことを……。はっ、あ

の本屋さん、まさかっ」

流れ星古書店に向かって全力で駆け出す。走る風の瞳からは、大粒の涙がこぼれていた。風が無意識に記憶から消していたこと。それは、幼い風と空を眺めている男性。青いワイシャツの星野によく似たその男性は、風と流れ星を見に行つた帰りに交通事故で亡くなった父親だ。風は父親の死があまりに悲しすぎて、記憶から消していたのだ。

必死に走って古書店へとたどり着くと、店の輪郭がぼやけている。かまわず慌てて店に入り、

「星野さん！ううん、お父さん！」

叫ぶが返事はない。ただ、それに呼応するかのように一冊の本が光っている。急いで抱き上げ、涙を流しながら、

「ずっと、私を見守ってくれてたのね。ありがとう……。お父さん」

その本を抱きしめ、ぼやけていく古書店を出る。そして振り返ると、そこにはもう古書店はなく、廃ビルが建っていた。風は抱えている本のタイトルを見る。そのタイトルは『愛しの娘の願い』だ。本の間には風と父親の思い出の写真が挟

まっていた。風は止めどなくあふれる涙をこぼしながら、

「これからも私、頑張つて生きるよ。森田君もいる。もう、辛いからつて逃げたりしない。見ててね、お父さん……」

そつと眩き、誓うのだった。

それからの風は今まで以上に前向きに生きていた。傍らには耕治がいて、将来の約束もしていた。二人で暮らし始めた部屋には風たちを見守るように、世界一大切なあの本たちが並べられていた。今も淡い瞬きをたたえて。